

## 序章 青年層の生活と意識（青森20-30代の住民意識）に関する調査

羽瀧 一代（弘前大学）

本報告は、トランスローカリティ研究会がおこなった、青森県むつ市とおいらせ町に居住する20代から30代の男女を対象とした、地方在住者のライフスタイルと社会意識に関わるアンケート調査の結果である。地方在住者と一口に言っても様々な地方があり、地域があり、多様な人々がそれぞれの生活を送っている。地方といっても病院や高等教育機関が存在しない自治体であったり、公共交通のアクセスが悪く生活に影響を及ぼすような地域もあったりする。また首都圏のような大都会ではないものの、生活の利便性が高く、医療や教育などのサービスを受けるために苦労しないような地方の中核をなすような地域もある。同じ地方という言葉で示されているものの、異なる様相を示す様々な地域がある。

いっぽうで、都市と田舎という軸が見直されるべきであることはこれまでも指摘されてきたことである。交通網の発達・モータリゼーションによりヒト・モノ・サービスなどの移動のハードルが下がっている。加えて高度情報化によってコミュニケーションの地理的障壁は撤廃されつつある。これと関連し、ライフスタイルや労働はこれまでの地方研究で示されてきた結果とは異なる様相を呈している。さらに場所に規定されない行動や意識も明らかにされつつある。本調査は、トランスローカリティ研究会メンバーでもある轡田竜蔵（2016）がマツダ財団の委託研究としておこなった「広島20-30代住民意識調査」をベースとして設計している。広島調査から得られた地方に関する実証的な知見を青森調査においても検証してみようという試みである。つまり、もしも広島で得られた地方中枢拠点都市圏に属する地域とそこから外れる地域とのあいだにある相違が青森でも検証されるならば、そこには日本全国でみられる地方の中枢拠点都市圏とそれ以外の地域のあいだにある差異性とあらゆる地方にみられる相同性が推測可能になるだろうし、広島と青森との間に差がみられるならば、西日本と東日本という地理的位置などによる文化や社会関係の差を確認することになる。広島と青森が同様の結果を示すならば、日本全国の地方の一般的特性を明らかにする手掛かりとなるかもしれない。つまり本研究はトランスローカリティという地方を超えた地方性ともいうべき、地方を理解するための新しいモデル構築をおこなうエビデンスを得ようとする試みでもある。

ただし、このような目的を達成するためには理論的な地域サンプリングを必要とするうえに、調査時点の統一も必要である。広島県と青森県という地域の選択は、トランスローカリティモデルを議論していくための厳密な理論サンプリングをおこなった結果ではないし、同時期に行った調査でもない。したがって本調査はモデル検証のための実査に向けたプレ調査に相当している。広島調査の2地域のサンプリングは消費生活や労働、移動や人口などを鑑み、地方中枢拠点都市と条件不利地域に近い都市とが選択されている。このサンプリングには地域の異質性を代表できるという仮定のもとでおこなわれている。

条件不利地域とは行政用語として近年の行政文書に散見され、また学術用語としても使用されはじめている。いずれも中山間地や離島、島嶼部など地理的に都市部から一定程度以上距離があり、雇用機会も少なく、産業振興をはじめとした社会経済的な発展がのぞみにくい地域を指していることが一般的である（白石・羽瀧、2016）。しかし青森に所縁のある人間が想像する条件不利地域と広島に所縁のある人間が想像するそれとでは、同じ研究会に所属する社会学者であっても異なる。都市部からの一定程度以上の距離とはどのくらいの距離を指すのか、雇用機会というのはどのようなことをイメージするのか、産業振興の遅れ、高等教育機関の不在、医療過疎の程度等をどのように測るのかという点については、研究者のもつ実感やイメージによって異なり、科学的に考えるならば定義によって異なるとしかいいようのない事態を呈している。それは地方中枢拠点都市についても同様のことがいえる。

今回の青森調査においては、広島で選択された2地域と条件が比較的近いと考えられる場所を選択している。広島市を中心とした都市雇用圏に位置する府中町にはイオンモールがある。八戸市を中心とした都市雇用圏に位置するおいらせ町にもイオンモールがある。同じイオンモールであっても店舗の規模や入込客数などは異なるだろうし、広島市を中心とした都市雇用圏と八戸市を中心とした都市雇用圏では規模がまるきり異なる。ただし青森県内には府中町に相当する場所はおいらせ町しかない。府中町もおいらせ町も県内随一の規模をもつ都市雇用圏に包含されているという点においては、地域選択にある程度の妥当性があるものと考えている。また三次市からの広島を中心とした都市雇用圏の繁華街へのアクセスとむつ市の八戸市を中心とした都市雇用圏（もしくは青森市を中心とした都市雇

用圏)の繁華街へのアクセスは似たようなものかもしれない。むつ市は、自家用車や公共交通機関を利用した場合のアクセシビリティ、人口の程度等という観点から広島調査と比較する目的からサンプリングするならば青森県内のなかではもっとも妥当性があると思われる。

調査項目についても、可能な限り広島調査と比較できるように設計している。地域イメージ、居住地域の価値観と居住歴、労働状況と価値観、自己評価と人生に対する価値観、生活に対する価値観と人間関係、社会や政治に対する意識、という主観的意識と価値観が質問項目の中心をなしている。広島調査における、地域、労働、人間関係に対する満足度と本人の幸福度と独立して変数を作成しているという点が従来の社会学における幸福研究とは異なりラディカルで面白いパースペクティブを提供していた。青森調査においてもこれらの項目を引き継ぎ、地方在住者の幸福が何によって決定されているのか、そして都市、もしくは地方といった住む場所によって幸福度が規定されるのかどうか、確認してみたい。もしも地域によって幸福が規定されないのであれば、何が幸福を決めるのだろうか。広島調査と本調査はこのような問いに答え、地方性を超える地方性、つまりトランスローカリティとは何かを探るための礎である。調査概要は以下の通りである。

調査時期：2018年4月～5月

対象地：青森県むつ市・おいらせ町

対象年齢：20歳から39歳

調査方法：選挙人名簿を用いた無作為抽出（系統抽出）によるアンケート調査（郵送法）

計画サンプル：各1500票（合計3000票）

有効回収サンプル：340票（22.6%）：男性55.3% 女性44.7%（むつ市）

340票（22.6%）：男性47.1% 女性52.9%（おいらせ町）

#### 参考文献

轡田竜蔵2016『平成26年度 公益財団法人マツダ財団委託研究「広島 20-30 代住民意識調査」報告書（統計分析篇）【第2版】』公益財団法人マツダ財団

轡田竜蔵2017『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房

白石壮一郎・羽瀨一代2016「条件不利地域普通科校の高卒後の移動と地元定着：青森県下北郡北通の同窓会調査から」『人文社会科学論叢』（人文科学篇）弘前大学人文社会科学部